

令和元年6月3日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03236

研究課題名(和文) ソロモン諸島におけるバハーイー教徒の信仰生活と宗教共生に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological studies on Baha'is and religious symbiosis in Solomon Islands

研究代表者

石森 大知 (Ishimori, Daichi)

神戸大学・国際文化学研究科・准教授

研究者番号：90594804

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ソロモン諸島におけるバハーイー教徒とキリスト教徒の共生関係を考察するものである。バハーイー教徒は、改宗後もキリスト教徒の諸儀礼や行事に参加している。そこには2つの論理がみられる。1つは、彼らは自らを「見えない存在」とする実践を行っていること。もう1つは、彼らは「宗教(lotu)」と「伝統」を異なるものとみなし、後者の領域に親族的な事柄を置くことで、既存の社会関係の維持を図っていることである。これらの論理が村落部における二者間の共生関係の基盤にあることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バハーイー教はグローバルな規模で拡大する最新の世界宗教であるにもかかわらず、その先行研究は限られている。数少ないバハーイー研究はおもに中東研究の枠内で実施され、ムスリムとの暴力的な軋轢に注目するなど偏向がみられる。本研究ではバハーイー教と他宗教との共生に注目し、ソロモン諸島の事例に基づき「見えざる存在」としての実践や、社会関係の維持のあり方が明らかとなった。これらのことはメラネシアの枠を超え、現代的な宗教共生を考える上で意義があるといえる。

研究成果の概要(英文)：This research examines the symbiotic relationship between Baha'is and Christians in the Solomon Islands. After the conversion, Baha'is have continued to participate in Christian ceremonies and events. There are two logics there. One is that they practice to make themselves religiously "invisible." The other is that they regard "religion (lotu)" and "tradition (kastom)" as different areas. By doing so, they maintain their existing social relationships in the latter area. Finally, I showed that these logics are the foundations of the symbiotic relationship between the two religions in the village level.

研究分野：人文学

キーワード：バハーイー教 マイノリティ 宗教共生 信仰生活 改宗 ソロモン諸島

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、ソロモン諸島におけるバハーイー教徒の信仰生活を明らかにするとともに、彼らとキリスト教徒との共生関係について考察を行うものである。ソロモン諸島の総人口 56 万人の 97 パーセント以上はキリスト教徒であり、クリスチャン・カントリーと称されることもある。しかし、とくに民族紛争 (1998 ~ 2003 年) の終結以降、主流派による国家政治への介入や援助機関への接近などをおもな理由として、主流派からの改宗が加速している。注目すべきは、従来からみられる主流派以外の教会への改宗ではなく、キリスト教諸宗派以外への改宗が増加傾向にあることである。現地メディアや研究者が関心を寄せるのはイスラームへの改宗であるが、信徒数の伸びからすればバハーイー教への改宗の方が注目に値する。応募者がソロモン諸島のバハーイー教本部で入手した資料を踏まえれば現在、その信徒数は 1 万人に達する勢いである。このような状況を踏まえ、ソロモン諸島のバハーイー教徒の歴史のほか、彼らの信仰生活の実態とマジョリティ社会との宗教共生に関する本研究を着想するに至った。

(2)バハーイー教は、19 世紀半ばにカージャー朝イランでバハーオッラーが創始した一神教であり、キリスト教に次ぐ広がりや達成した世界宗教とされる。しかし、バハーイー教に関する人類学的・宗教学的な専攻研究 (以下、バハーイー研究) は「中東研究からも体系的に排除されてきた」[Velasco, 'Academic irreverence or disciplinary blind-spot?' 2001:189]と指摘され、その蓄積も限られている。数少ないバハーイー研究に共通することは、イスラーム社会の宗教的マイノリティとしてのバハーイー教に焦点をあてた研究、より正確にはバハーイー教徒とムスリムとの暴力的な軋轢を含む相互作用に関する研究が大半を占める点である [MacEoin, 'The Crisis in Babi and Baha'i Studies' 1990; Scharbrodt, *Islam and the Baha'i Faith* 2008]。これは、バハーイー教が「イスラームの異端」とのレッテルを張られ、中東をはじめ世界各地でイスラームとの軋轢を通して形成・発展してきたことを象徴している。

ここでソロモン諸島を含むメラネシア地域に目を移せば、バハーイー研究は皆無に等しい。そもそもメラネシアの宗教研究は、伝統宗教とキリスト教のシンクレティズムに関する研究に偏っており、伝統宗教でもなく、キリスト教でもない、それ以外の宗教の研究は完全に抜け落ちてきた [Tomlinson et al. (eds), *Christian Politics in Oceania* 2012]。それでは、キリスト教が圧倒的なマジョリティの社会にあって、ソロモン諸島の一部の人々は、どのような状況や契機においてバハーイー教に改宗し、いかなる宗教的な実践を行ってきたのか。また、改宗後の日常生活において、親族や近隣住民を含む既存の社会関係をいかに継続または断絶しているのか。本研究では、このようなバハーイー教徒をめぐる宗教的・社会的な側面の考察を通して、宗教的マイノリティとしての彼らの実態に迫ることを目指す。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ソロモン諸島におけるバハーイー教徒の信仰生活を明らかにするとともに、彼らとキリスト教徒との共生関係について考察するものである。ソロモン諸島では、キリスト教諸宗派内での対立がみられる一方で、バハーイー教徒とキリスト教徒との間で争いが顕在化したことはない。そこで本研究では、ソロモン諸島のバハーイー教徒に注目し、彼らの改宗過程や信仰生活を明らかにするとともに、改宗以前からの社会関係の維持・変容およびキリスト教徒との共生の在り方について考察を行う。

(1)まず、メラネシア地域およびソロモン諸島におけるバハーイー教の宣教史を明らかにする。バハーイー教がどのような理念や意図のもとでソロモン諸島を含むメラネシアを宣教エリアに加え、いかなる制度や組織をもたらしただのか。また、宣教に携わった人々は、バハーイー教の優越性をどのように伝え、ソロモン諸島民との間でいかなる相互作用を起こしたのかなどについて調査し、バハーイー教の宣教活動の歴史的背景を明らかにする。

(2)つぎに、バハーイー教徒の日常的な信仰生活についてである。キリスト教からバハーイー教に改宗した人々の改宗譚を聞き取り、そのときのコンテキストや社会的背景を踏まえた分析を行う。また、バハーイー教徒が日常的に実施する個人礼拝、19 日毎の祝祭、各世帯や近隣の信徒同志で行う日常的集団礼拝、バハーイー暦第 19 月の断食などの儀礼や行事の調査を通して信仰生活の実態を明らかにする。バハーイー教の神観念と預言者観は、とすればキリスト教的価値観の不完全性を示唆する内容が含まれるが、これらの信仰の内容を解明する。

(3)最後に、キリスト教徒との共生関係に関する考察である。バハーイー教徒がキリスト教徒と向き合いながら採る、マイノリティとしての多角的で柔軟な方策を把握する。具体的には、両者の日常的な交流や贈与交換などの社会関係に関わる事例のほか、潜在的な軋轢や緊張関係の事例を集める。これらの資料を比較検討することにより、対抗を先鋭化させないマイノリティの方策、あるいはマイノリティであるバハーイー教徒を受容するマジョリティ社会の寛容性など、ソロモン諸島社会に固有の宗教共生の論理を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、これまで筆者 (研究代表者) が研究対象としてきたソロモン諸島の村落部 (マラ

イタ島およびニュージョージア島)と都市部(ガダルカナル島ホニアラおよびウェスタンギゾ、ムンダ)において、バハーイー教徒の宗教的な実践に着目してフィールドワークを実施し、民族誌的研究を行うことに主軸をおく。

(1)バハーイー教に関する基礎的資料の収集・講読を行う。中東におけるイスラーム復興運動のなかでバハーイー教に対する排除や差別が強まったものの、「バハーイー教の特徴は、見えない宗教、見えない共同体であること」[Ruff, 'Baha'i: the invisible community' 1974:665]とも指摘されている。逆にいえば、それはムスリムがマジョリティ社会のなかにあつて、マイノリティとして目立たぬように生きてきた証明といえる。そこでバハーイー教関連文献を可能な限り広く収集し、バハーイー教の歴史や信仰のほか、バハーイー教徒とマジョリティ社会の軋轢や共生に関する検討を行う。

(2)バハーイー教徒の改宗過程と信仰生活について、島の人々の視点からその評価を聞き取る。メラネシアの宗教的マイノリティの研究の中では、ペンテコステ諸派への改宗過程の研究が進んでいる。先行研究によれば、ペンテコステ諸派への改宗は、おもに都市部で生じており、また改宗行動も(共同体単位ではなく)個人単位で起こっていることを指摘している。さらにペンテコステ諸派の特徴として、アルコールやドラッグの依存症、HIV感染症への対応に積極的とされる[Ernst, *Winds of Change* 1994]。しかし、筆者がバハーイー教本部で実施した予備調査によれば、バハーイー教への改宗はおもに村落部で生じており、また都市部よりも村落部の信徒数が多い。これはペンテコステ諸派とは明らかに異なる現象であり、既存の研究を踏まえたうえで、バハーイー教への改宗に関する聞き取り調査を行う。改宗に関する調査・研究と並行して、日常的な信仰生活に関する資料の収集を進める。

(3)バハーイー教徒とキリスト教徒の社会関係の維持・変容、および共生関係の在り方に関して村落部および都市部において実地調査を行う。それと同時に、その民族誌データを分析するためのメインテーマである宗教共生の概念と研究方法の有効性を、隣接分野を参考にしながら検討し、文化人類学の立場から理論的に検討する。そのさい、分割可能体といわれるメラネシアの人格論[Strathern, *Gender of the gift* 1988]を足掛かりとする。こうした自他弁別の柔軟性が、アイデンティティの差異に基づく排除を弱めると同時に、複数の信仰を接合・両立させる可能性をもつと考えられる。自他の日常的な関わり合いを射程に入れ、共生状態を作る微細なプロセスを注視することで、ソロモン諸島に固有の宗教共生の在り方について考察を行う。

4. 研究成果

(1)バハーイー教への改宗過程 反イギリス的風潮とチーフの影響力

ソロモン諸島にバハーイー教をもたらしたのは、アメリカ人のブルム夫妻とその娘である。アルヴィン・ブルムは、第二次世界大戦時に同諸島ガダルカナル島での従軍経験があった。彼ら一家は、1954年に首都ホニアラに到着した。一方、ソロモン諸島出身者でバハーイー教布教の最大の功労者とされるのは、ハムエル・ホアハニア(以下、ハムエル)(1907年~1986年)である。彼は、自らの親族に改宗を促しただけではなく、ブルム夫妻とともに布教活動に参加した。彼の出身地であるマライタ島の西アレアレはソロモン諸島の中でバハーイー教徒がもっとも集住する地域であり、本研究では同地域、中でもハムエルの子どもおよび親族が数多く居住するT村をおもな調査対象としてフィールドワークを行った。

ハムエルは1907年に母の出身地のマライタ島西クワイオに生まれ、父の出身地である同島西アレアレのH村で育った。彼は当該地域の伝統的なチーフの家系に生まれたこともあり、南洋伝道会(SSEM)の聖書学校に通って現地人説教師となった。その後、彼は、ソロモン諸島民とイギリス人宣教師は対等・平等な関係にはなく、自分たちは蔑まれていると考えるに至る。やがてキリスト教に疑問を感じるようになり、キリスト教から離れ、伝統宗教に回帰することを検討していたという。

1956年、ハムエルは首都ホニアラで上述のブルム夫妻と出会い、英語で記されたバハーイー教の読み物入手した。その後、彼は聖書と比較しながら、バハーイー教について独学で学んだ末、あることを発見する。バハーイー教の聖典は預言者であるバハー・ウッラー本人が記しているのに対して、キリスト教の聖書はそうではないことである。ハムエルの解釈によれば、聖書はイエス・キリスト本人が直接的に記したのではなく、使徒たちが彼らの言葉で記したものである。ハムエルにとって、前者の方がより具体的でわかりやすい内容が多く、後者の方が寓話や比喩が散りばめられており理解するのが難しい。加えて、ジーザスの時代よりも、バハー・ウッラーの時代の方がより新しいがゆえに、今を生きる自分たちにとってバハーイー教の教えの方が望ましいようにハムエルには思えたという。1957年、ハムエルは、キリスト教よりもバハーイー教の方が「本物である」という確信をもち、改宗を決意する。それと同時に自らの近い親族を集め、毎朝・毎晩、バハーイー教の教えを説いた。とくに彼はバハーイー教においてすべての人間は肌の色や性別、生まれた家系などに関係なく1つであり、全員が平等であることを強調したという。ハムエルに次ぐ改宗者はハムエルの長男DHとその妻であり、さらに数名のハムエルの息子・娘たちが続いた。その後も、ハムエルの近い親族を中心に西アレアレにおいて改宗が進展した。

以上のように、西アレアレにおけるバハーイー教への改宗は、既存のキリスト教および西洋人（イギリス人）に対する不満や批判が背景にあった。植民地主義的な状況下、キリスト教の宣教師が説く友愛や兄弟愛などの観念が疑問視され、それがバハーイー教への改宗を後押ししたといえる。加えて、当該地域の伝統的なチーフでもあったハムエルの主張はそれなりに影響力をもって人々に受け入れられた。宗教的な自己探求の結果として集団的な改宗が起こったとは必ずしもいえないが、西洋人に対する批判も高まる中、ハムエルの主張に賛同・追従する形で彼の親族ネットワークを介してバハーイー教が浸透・拡大したといえる。

(2)バハーイー教徒の信仰生活 「新しいロトゥ」としてのバハーイー教

本研究では、ソロモン諸島民のバハーイー教信仰について、彼らが日常的に行っている「中心的な活動(Core Activities)」に注目した。「中心的な活動」とは、スタディ・サークル、祈りの会、子どもクラス、ジュニア・ユース・グループの4つのほか、ディープニング・クラス（以下、勉強会）が挙げられる。中でもバハーイー教の教えを披露し、またその理解を深めるという点では、スタディ・サークルと勉強会が重要である。バハーイー教ではとくにこれらの活動を通して知識と技術を習得するとともに、バハーイー法を経験し、心の教育をし、精神的に立ち上がるとされるからである。

たとえば、西アレアレのT村で開催された勉強会の事例を報告する。この勉強会では、ハムエルの長男であるDHがスピーカーとなり、西アレアレにおけるバハーイー教の歴史について語られた。そのおもな内容については西アレアレの人々が日常的に実施する宗教関連行事でも度々語られており、同地域のバハーイー教徒に一般的に共有されているといっても差し支えない。この勉強会で語られ、そして信徒の議論を通して共有されたのはおもにつきの3つの点であった。まずバハー・ウッターをジーザスの生まれ代わりとみなす点、そして聖書はジーザス本人が記したのではないため、必ずしも神の言葉とはいえないと解釈する点（一方で、神の言葉を受けたバハー・ウッター本人がバハーイー教の聖典を記したとする点）が挙げられる。これらとは、聖書の位置付けをめぐってやや矛盾するといえなくもない。なぜなら、は聖書に依拠して説明されるにもかかわらず、では聖書に対して批判的な立場を取るからである。

さらに、バハーイー教を「新しいロトゥ」とみなす点についてである。太平洋においてロトゥというポリネシア起源の語はとくにプロテスタント諸派に属する人々の間で広く用いられ、「キリスト教」を意味する。あるいは動詞として使用されることもあり、その場合は「キリスト教に改宗する」ことを指す。DHは「バハーイー教はもっとも新しいロトゥであり、今の時代にもっとも相応しいロトゥ」と主張しているが、その背景には「古いロトゥ（彼らにとって具体的に想起されるのはSSEM）」が進化したものが、「新しいロトゥ」としてのバハーイー教という構図が見受けられる。そこにおいてバハーイー教は、キリスト教の発展的な延長線上に位置付けられていることになる。

一方で、DHをはじめ西アレアレの人々はバハーイー教をイスラームの系譜に位置付けたり、シーア派ないし十二イマーム派との対比で語ることは稀である（バハーイー教は、シーア派の多数を占める十二イマーム派・シャイヒー派信徒であったバーブが創唱したバーブ教を、バハー・ウッターが継承・発展させた宗教である）とはいえず、バハーイー教はその歴史的ルーツを示唆するように、イスラーム的要素を内包することが指摘されてきた。それが典型的にみられるのが、日常的な祈りで用いられる礼拝文の内容および形式のほか、その祈りの形式的側面に関してである。たとえば、バハーイー教における義務的な祈りと献身的な祈りの区別は、イスラームのサラアとドゥアーに相当するものであり、そこにイスラーム的伝統がみられると考えられる。ただし、バハーイー教では2つの祈りともに各個人が行うと定められ、イスラームの集団礼拝やキリスト教の典礼のように義務としての集団的な礼拝は存在しない。というのも、バハーイー教では死者儀礼にあたる「故人のための祈り」を除けば、集団的に行う祈りは設定されていないからである。以上を踏まえれば、2つの祈りの区別と個人単位での祈りは、バハーイー教の祈りの特徴といえる。

しかし、筆者が西アレアレにおける調査から明らかとなったのは、日常的な祈りににおいて本来は区別すべき義務的な祈りと献身的な祈りの相違を曖昧に扱うとともに、おもに家族内で集団的に行う祈りを日課とするなどの形式を取るという点である。このような解釈や行為はともすればバハーイー法から逸脱し、またバハーイー教が潜在的に有するイスラーム的伝統を脱色する一方で、キリスト教的過去との連続性を示すものである。かつてキリスト教徒であり、今もクリスチャン・カントリーに身を置く彼らは、キリスト教的な価値観や諸実践を意識的・無意識的に参照しつつ、バハーイー教徒として生きている。「新しいロトゥ」としてのバハーイー教という表現は、このような彼らの現在を端的に表しているといえる。

(3)キリスト教徒との共生関係 村落部と都市部の比較検討

メラネシアの人類学的研究によれば、キリスト教的価値観はメラネシア社会に深く浸透しており、親族集団の重大事項を決定するさいにも、キリスト教の教えや聖書が判断基準となっているとされる。加えて、キリスト教の各種儀礼や行事がライフコースにおいて重要な位置を占めることが民族誌的に明らかにされてきた[橋本、『キリスト教と植民地経験』、1996]。であるとするれば、キリスト教からバハーイー教への改宗は、既存の社会関係にどのような影響を与え

るのかに注目しなければならない。潜在的にはキリスト教徒との軋轢や葛藤を生じさせ、また人生のセーフティーネットを欠損しかねない状況において、人々はいかなる対応をして日常生活を構築しているのだろうか。このような問いに対して、2つのレベルでキリスト教徒との関係性が想定できるだろう。1つは、村落部における親族との関係性であり、もう1つはそれを超えるおもに都市部におけるキリスト教徒との関係性をめぐってである。

まず、村落部におけるキリスト教徒である親族との社会関係についてである。先行研究では、メラネシア社会において親族間の関係はきわめて重要であり、それは個人の人格に先立つものとされてきた。マリリン・ストラザンによれば、人は、その人を取り巻く社会関係を通して規定される。そこでは、人が関係の中を移動するのではなく、関係が人を動かす。こうして個人は、関係なしには人格化されない一方、その身体は他者との相互作用を介して具現化する。すなわち、人はそれを構成する「関係」と同義となる [Strathern, *Gender of the gift* 1988]。このような関係がもっとも顕在化するのが、とくに各種の人生儀礼においてである。現在のメラネシアにおいて伝統的な信仰と強く関わる諸儀礼は忘れられつつあるが、中には「キリスト教化」する形で大きく変容しながらも継承、あるいは創造されてきた儀礼もある。たとえば、結婚儀礼や葬送儀礼などに代表される人生儀礼はそのうち重要なものである。

バハーイー教徒は、自らのキリスト教徒の親族の諸儀礼にどのように参画し、またそれをどのように認識しているのか。筆者が調査を行った西アレアレのT村はおもにバハーイー教徒の村落であるが、近隣には南洋福音教会 (SSEC。かつてのSSEM) やカトリック教会に属する人々が居住しており、T村の人々と親族関係にある者も数多い。たとえば筆者はT村のバハーイー教徒とともに、おもに南洋福音教会に属する人々が暮らすY村で実施された結婚儀礼に参加した (筆者は、母方の第一イトコの結婚式にのぞむT村の男性ほかに同行)。結婚儀礼そのものは教会建物内で行われたが、バハーイー教徒たちも建物内に入った。彼らの中にはキリスト教の聖書および讃美歌集を手に入れている者もあり、讃美歌を口ずさむ者もいた。その後、いわば伝統的な饗宴の準備にバハーイー教徒は積極的に関与したあとでそれに参加し、二人のキリスト教徒の結婚を祝うとともに、モノがやり取りされる現場にも居合わせた。

この結婚式に関して、バハーイー教徒の視点から2つの点が指摘できる。1つは、バハーイー教はいわばキリスト教の1つ宗派でもあり、それがゆえに自分たちがキリスト教式の儀礼に参加することに違和感がないという認識である。この点は上述の「新しい口トウ」という表現に端的に示されている。ただし、SSECの信徒の中には自分たちをキリスト教徒ではないと認識する者がいること、自分たちの参加を歓迎しない者がいることは知っており、(比較的親族関係が近いといえる第一イトコの結婚式ではあっても) 建物の隅のほうに陣取り、やや控えめに讃美歌を歌ったという。もう1つは、結婚とはピジン語でいうカスタム、すなわち伝統文化の領域に位置するという認識である。すなわち、結婚はキリスト教において重要な意味があると同時に、カスタムの領域、つまり伝統文化の領域においても同等以上に重要な意味をもつ。よって、彼らによれば、親族とは、教会のネットワークとは無関係にカスタムの領域においてつながっているのであり、そこにおいて宗教あるいは宗派の違いは別問題であるとする。

一方、親族の関係を越えた範囲 (ないしカスタムを共有しない範囲) といえる、都市部における社会関係についてである。まず、ソロモン諸島民の多くはバハーイー教について知らないという点を指摘しておく。より正確に言えば、バハーイー教という名称を聞いたことはあるが、それは「ホニアラ郊外のバハーイーという地名 (この土地はかつてブルム夫妻が購入したものであり、そこにバハーイー教の本部ともいえるバハーイーセンターがある)」であるか、あるいは「キリスト教の新しい宗派の1つ」と考えている者が圧倒的に大多数を占めている (一方で西アレアレのキリスト教徒を対象に同様の聞き取りをしたところ、「キリスト教の宗派ではない」と指摘する者が多い)。筆者が都市部でキリスト教徒に対して聞き取りを行った範囲では、バハーイー教がシーア派に淵源をもつことを知っている者は皆無であった。すなわち、多くの都市住民はバハーイー教を知らないか、あるいは知ってはいても数多く押し寄せるキリスト教の新しい宗派の1つであろうと考えている。そして後者の認識は、その思考方法は明らかに相違するものの、ほかならないソロモン諸島のバハーイー教徒の認識とも符合する。ソロモン諸島の都市部において、これまでにバハーイー教徒とキリスト教徒の軋轢が顕在化したことはないが、背景にはこのような意味での (クリスチャン・カントリーにおける) 「見えざる存在」としてバハーイー教 (徒) という側面が指摘できるのである。

(4)まとめ

ソロモン諸島のバハーイー教徒にとっての宗教的共生の論理について2つのことが明らかとなった。1つは、クリスチャン・カントリーともいわれるソロモン諸島において、バハーイー教徒が自らの宗教をキリスト教的文脈に置いていることが指摘できる。それは意識的・無意識的を問わず、自分たちを「見えない存在」にし、そのようなものとして受容される一因となっている。もう1つは、カスタムと宗教 (もしくはキリスト教) を異なる領域とし、とくに親族間の社会関係は前者にあるとするメラネシア社会に固有の文化的文脈がある。これも異なる宗教同志の共生を意図的に目指すものではないが、結果的に宗教の違いに起因する軋轢をおさえる効果をもたらしているといえよう。ソロモン諸島は1998年~2003年まで大規模な民族紛争を経験し、そこにおいてカスタムの違いは重要な課題の1つであった。そう考えれば、キリスト教が自らの伝統文化に類するものと認識されるようになったとき、宗教による違いに端を発

する争いが生じるのかもしれない。

冒頭で指摘した通り、バハーイー研究は中東を中心とするイスラーム研究の一部に位置付けられ、ムスリムとの関係性を軸に議論されることが多かった。そこではバハーイー教徒とムスリムの相互作用や軋轢・衝突に注目する研究が支配的であり、またバハーイー教の「異端さ」が強調される傾向がなかったわけではない。とはいえ、世界宗教の1つであるバハーイー教は各地域の文化や伝統を尊重しながら拡大してきたのであり、それに伴ってイスラーム以外の他宗教との関係性についても議論の射程に入れるべきであろう。この点に関して、本研究は依然として数少ないキリスト教圏から提出されたバハーイー教研究であり、既存の研究を相対化する学術的意義があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

石森 大知、「『新しい口トウ』としてのバハーイー教 ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』、査読有、45巻、2019年、pp.1-18。

石森 大知、「ソロモン諸島におけるリバイバル運動と宗教的分裂 社会宗教運動論からの再検討」『ソシオロジスト』、査読有、19巻、2017年、pp.1-23。

〔学会発表〕(計4件)

石森 大知、「宗教とソーシャル・キャピタル論の再検討 ソロモン諸島における教会主導の植林プロジェクトの顛末」日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学、2018年6月3日。

石森 大知、「汎オセアニア的世界観としての伝統・教会・政府」2017年度神戸大学国際文化学研究推進センター研究会、神戸大学、2018年3月16日。

石森 大知、「『生ける神の創造力』の現在 メラネシアの社会宗教運動論を振り返る」第73回神戸人類学研究会、神戸大学、2016年12月20日。

石森 大知、「生者と死者のつながり 南太平洋の事例から死生観を考える」第49回武蔵大学土曜講座、武蔵大学、2016年7月16日。

〔図書〕(計5件)

石森 大知、「宗教と開発をめぐる新展開 ポスト世俗化時代の人類学に向けて」石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学 グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社、査読無、2019年、pp.9-50。

石森 大知、「宗教とソーシャル・キャピタル論の再検討 ソロモン諸島における教会主導の植林プロジェクトの顛末」石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学 グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社、査読無、2019年、pp.191-233。

石森 大知、「信仰から開発へ ソロモン諸島の独立教会における「新しい生活」の変遷」大谷裕文・塩田光喜編『海のキリスト教 - 太平洋島嶼諸国における宗教と政治・社会変容』明石書店、査読無、pp.261-294、2016年。

石森 大知、「異質な他者とのつきあい方 異文化コミュニケーションから考える共生社会」大屋幸恵・内藤暁子・石森大知編『文化とコミュニケーション』北樹出版、査読無、2016年、pp.16-31。

石森 大知、「日常生活のなかの宗教 超自然的存在とのコミュニケーション」大屋幸恵・内藤暁子・石森大知編『文化とコミュニケーション』北樹出版、査読無、2016年、pp.66-80。

〔その他〕

ホームページ等

http://kuid.ofc.kobe-u.ac.jp/InfoSearch/html/researcher/article_obLdu8To-9z0-IBQ3mbe3w_ja.html?q=&wayf=keywords&backtoResultPath=/InfoSearch/View.do

6. 研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。